

大阪新聞 548.12.2

中国情報

中 嶋 嶺 雄

毛沢東と秦始皇

英雄豪傑として親近感

中国で孔子批判運動の一環としてすめられている秦の始皇帝への称賛ぶりはますます高まるばかりであり、始皇帝はいまや「専制暴君」から「革命君主」になつてしまつた感さえある。

人物を数えるには、なお今朝を齎るべし」
（二）でも毛沢東は、秦の始皇帝をはじめとする中国の歴代の帝王を並べたてたあとに、いずれも全能ではなかつたという真の英雄は現代にこそ現れるという意味を含めているのだが、そもそも毛沢東にとつて始皇帝は、その暴君としての側面よりも英雄豪傑としての側面に大きな親近感を持ち得る対象であつたので

東と関連した始皇帝像そのものを根本的に修正する必要があるのではないか。
第三には、衆知のように今日の中国は中ソ対立によって北方からの脅威に直面しており、民衆に對国防意識をさらに涵養せねばならない。最近ではソ連による対中予防戦争説さえ出はじめている。そうしたとき北方の異民族（北狄）の侵入に備えてあの万里の長城を築いた始皇帝の偉大な業績を思いおこさせることこそ、さし迫つて必要なのではないか。

べたことがある。ある。第二には、十全大会の習恩来政治報告が指摘した「五七二工程紀要」のなかで、林彪らが書いたものなどとしても毛沢東は「マルクス・レーニン主義の度を著して、秦始皇のやり方を実行する中国史上最大の封建的暴君である」という一節があることである。「五七二工程紀要」は

ある。第二には、十全大会の習恩来政治報告が指摘した「五七二工程紀要」のなかで、林彪らが書いたものなどとしても毛沢東は「マルクス・レーニン主義の度を著して、秦始皇のやり方を実行する中国史上最大の封建的暴君である」という一節があることである。「五七二工程紀要」は

会もまた閉けない上に、地方軍区の指導者たちは、いわば群雄割拠のありさまである。それだけに、あの群雄割拠する戦国時代の中国を強力に統一した始皇帝の治績をよみがえらせようとする中国官腦の現在の願望が、この始皇帝評価のキャンペーンにこめられているともいえるのである。

また第一に、始皇帝評価という報道に接して、私がすべしに思い浮かべたのは、毛沢東が一九三六年につくつた有名な詩「瀟湘春 雪」の一節であつた。

「惜むらくは秦始皇も漢武帝も、すこしく文采において輸（ま）けし風流の

いずれにせよこのキャンペーンが今後どのように展開するか、大いに注目せねばなるまい。
（東京外大助教）